

## 補綴治療のための検査法の新たな展開

皆木 省吾<sup>a</sup>, 藤澤 政紀<sup>b</sup>

### Emerging Evolution and Concepts in Clinical Tests for Prosthodontic Treatment

Shogo Minagi, DDS, PhD<sup>a</sup>, Masanori Fujisawa, DDS, PhD<sup>b</sup>

日本補綴歯科学会第 121 回学術大会におけるイブニングセッション I として「臨床イノベーションのための若手研究者の挑戦：補綴治療のための検査法の新たな展開」が行われました。本セッションは、公募型のシンポジウムという新しい試みで企画されました。この試みに会員がどのように反応するだろうかという一抹の不安もありましたが、当日は立ち見が出るほどの参加者で会場が埋め尽くされ、活気に満ちたものとなりました。

今回のセッションがこのテーマで企画された背景には、現在の歯科臨床においてブラキシズムや摂食・嚥下障害などの生体の機能的特徴をどのように反映させていくかということが臨床家・研究者において大きな興味を中心となっていることがあります。たとえば、舌圧痕が口腔異常機能活動の亢進をぼんやりと示唆しているように等、われわれが臨床において経験的に推測している内容にも根拠のないものも多く、もしかすると誤った推測を行っているかもしれません。咀嚼筋、舌、それをコントロールする脳機能の相互関係の解明が進むことは、歯科臨床に直接反映される結果を生み出すと考えられます。「予知性の高い補綴臨床」という表現でしばしば示されるトレンドのスタートラインにはう蝕、歯周疾患のコントロールがありました。当初はこれらは感染症としての観点を中心として捉えられ、インфекション・コントロールに力が注がれてきました。しかしその結果、感染のみでは対応できない歯科臨床の壁として機能的な「力のコントロール」が大きく注目されているのが現状であるといえるでしょう。これらのコントロールの必要性が叫ばれるなか、現象を正確にとらえ、発生メカニズムに迫る種々の具体的検査方法が必要とされています。

そこで、ブラキシズムのなかでもクレンチングに着目し、飯田 崇先生にそのメカニズムを探る検査方法として、機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) を用いた種々の研究についてご報告いただきました。継続的なクレンチング行為が運動野において脳の可塑性変化を引き起こす可能性があることなど、将来を見据えた補綴治療の検査方法についての展望もご紹介いただきました。

さらに田邊憲昌先生には、クレンチング抑制の方策として、認知行動療法の手法を応用した咀嚼筋筋電図によるバイオフィードバック訓練の効果について、開発した装置とともに報告していただき、新たな力のコントロールに対するアプローチへの展望を示していただきました。歯科臨床への応用に加え、無拘束下で筋電図測定できるという特徴を活かし、アスリートの支援を含めたスポーツ歯科への展開も期待される装置として注目される場所です。

吉川峰加先生には超高齢社会における補綴治療を支える舌圧検査法と題して発表していただきました。摂食嚥下には舌の機能が大きく関与することが知られていることから、舌圧を簡便に測定できる装置の登場は、歯科医師のみならず関連する医療従事者が使用できるという汎用性を提供するものであり、今後のリハビリテーションに対する応用が期待されます。義歯非装着では喉頭流入が多く見られ、舌運動や舌尖固定が不安定になること、さらには舌圧プローブの多岐にわたる応用の可能性も含めて貴重な発表をいただきました。

本セッションでは、顎口腔の機能に対する検査とそこから発展する補綴臨床の今後の展開を探るうえで種々の有益な知見を提供されたことと思います。また、このセ

<sup>a</sup> 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科咬合・有床義歯補綴学分野

<sup>b</sup> 明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野

<sup>a</sup> Department of Occlusal and Oral Functional Rehabilitation, Okayama University

<sup>b</sup> Division of Fixed Prosthodontics, Department of Restorative & Biomaterials Sciences, School of Dentistry, Meikai University

セッションのもう一つの特徴としては、現在非常にアクティブに活動されている若手研究者である3名の先生から、研究、臨床においてそのアクティブさを発揮するための原動力になったきっかけ、考え方、研究環境等をお伺いし、後に続く若手の研究者の道標となる逸話を聞かせて頂くことができたことが挙げられます。教育、臨床に加え研究を精力的に継続することの価値とそのモチベーションの維持を示してもらった機会となった本シンポジウムは、同じような環境で同じような悩みを抱く仲間

に希望と示唆を与えてくれたものと思われまふ。時代に即応してその能力を高めている若手研究者達のさらなる発展が期待できることを実感できたセッションであったと思ひます。

---

著者連絡先：皆木 省吾

〒700-8525 岡山県岡山市北区鹿田町 2-5-1

Tel: 086-235-6685

Fax: 086-235-6689

E-mail: minagi@md.okayama-u.ac.jp